PEACE石川

No. 3, 2001.2
発行：石川県平和運動センター
金沢市西念町105街区4号
(076)233-2170

組合掲示板に必ずはりだし、後は資料として保存して下さい。

STOP THE 教科書改悪

偏狭なナショナリズムの台頭を許すな！
歴史教科書改悪反対集会を開催

平和運動センターは一月三十一日、金沢市の県勤労者福祉文化会館で「歴史教科書の改悪を許さない県民集会」を開催し、労組員など約百人が参加した。

この集会は、実に百七十八人にものぼる地方議員（県内全議員のおよそ四分の一にあたる数字）の参加を得て昨年末に発足した「教科書の適正化を求める石川議員の会」の動きが本格化する三月議会を前に、こうした動きをけん制する意味合いも込めて企画したもの。

集会では、はじめに主催者を代表して細井満夫代表が「新しい歴史教科書をつくる会を中心とした一連の動きは、単に歴史の真実を否定するだけではなく、まさに自分たちに都合のいい新しい歴史をつくろうとするもので、断じて認めるわけにはいかない」と挨拶。

続いて、山本隆司さん（沖縄県教組教文部長）が「歴史教科書改悪問題から見えてくるもの～沖縄からみる日本の平和」と題して記念講演し、現在、文部科学省に検定申請が出されている産経・扶桑社版歴史教科書の問題点、特に沖縄戦に関する問題記述等を具体的に指摘しながら、「日本軍による住民虐殺という実態を覆い隠し、まさに聖戦であったと言わんばかりの記述内容には沖縄県民として本当に腹が立つ」と述べるとともに、陸・海・空のいずれにおいても日本の主権が存在せず、憲法九条も単なる飾りに過ぎないという状態が続く沖縄の実情を説明した上で「周辺事態法をはじめとした一連の法整備は、こうした状況を日本全土に作り出すこと、つまり本土の沖縄化を狙ったものであり、今回の教科書問題も 戦争のできる国づくり をめざした一つの動きとして見ておくことが大切だ」と指摘した。

熱弁をふるう山本さん

戦争に結び付く危険性を秘めた歴史教科書問題

最後に「子どもたちにとって、教科書というのは絶対的な存在であり、それだけに与える影響も大きい。戦争賛美や皇国史観徹底した他民族差別などを基調とした今回の歴史教科書は、現場に働く一人の教師という立場からしても絶対に認めることはできない」と訴えた。（後日、講演録を発行・配付する予定。なお、産経・扶桑社版歴史教科書の問題記述の数々についてはウラ面を参照！）

2001－新世紀のつどい－
～平和の危機を乗り越えよう～

平和運動センターは一月五日、金沢市の労済会館で「二〇〇一 新世紀のつどい」（社民党県連合、同金沢支部連合が共催）を開催し、新世紀における具体的な活動をスタートさせた。

この取り組みは、一昨年のガイドライン関連法の制定以来、盗聴法、住民基本台帳法、そして国旗国歌法といったいずれも「戦争」をキーワードとする法律が矢継ぎ早に整備されたという今日的な状況を踏まえ、「核も戦争もない、基地も原発もないそんな二十一世紀をめざして」をスローガンに開催。

挨拶に立った細井代表も「大東亜聖戦大碑の建立、小松軍事基地の強化能登原発二号機の建設、そして珠洲における調査再開問題などなど、この狭い石川県においても、私たちの平和を脅かす課題が山積している。戦争と破壊の世紀であった二十世紀をしっかりと総括し、平和と繁栄の世紀を私たちの力で築いていこう」と力強く訴えた。

クローズアップ
チンピラと使い走りの関係

事務局長　冨瀬　永

さる二月九日に発生した「えひめ丸事故」。当県出身の総理大臣が、のんびりとゴルフに興じていたというオマケ話も加わって大問題になっているが、それはさておいて、今回は事故を起こした米軍について考えてみたいと思う。

今回の事故でも問題となった、民間人の訓練参加。マスコミ報道によるといわゆる米軍による宣撫工作の一環として以前から続けられていたようだが、実は日本国内でも実施されていたことがこのほど判明し、大きな波紋を投げかけている。

大分県日出生台演習場（本土五カ所に分散されたうちの一つ）で実施された実弾砲撃演習での話だが、二月九日に行われた地元自治体関係者向けの公開演習の際、参加した民間人に一五五㎜りゅう弾砲を発射させたというもので、もちろん撃った方も撃った方だが、潜水艦事故と同様、撃たせた側の責任が厳しく問われてしかるべきである。

ところで、事故の余韻がまだ冷めやらない二月十七日、米英両軍がイラクを空爆したというニュースが飛び込んできた。かつての湾岸戦争の時もそうだが、私はこうした武力行使、力による制裁に日頃から強い疑問を感じている一人である。相手がナイフを持てば、こちらはそれを上回る日本刀を持つ。すると相手はそれをさらに上回る拳銃を持つ。こちらは負けじと機関銃を持つ。つまり武力と武力の衝突は際限のない軍拡競争を生み出すだけで、問題を根本から解決する手段としては明らかに不適当である。

政治とは何なのか、国際関係はどうあるべきなのか、そして国連の役割とは・・・。

もちろんイラク側にも問題があるのだろうが、言う事をきかないからといって、話し合いという大切な過程を一方的に放棄し、力づくで言う事をきかせようとする。まさに刃物で脅して金を巻きあげるチンピラの手口であり、対米支援に血眼をあげる日本政府は、さしずめチンピラの「使い走り」ということになるのではないだろうか。

これが驚くべき記述内容の実態だ！

産経・扶桑社版歴史教科書

以下は、「新しい歴史教科書をつくる会」（西尾幹二会長）が文部科学省に検定申請を出した、「中学校歴史教科書」（産経・扶桑社版）に掲載された問題記述の数々です。是非ご一読を！

なお、【　】内は教科書の見出し、＊は本文・コラムの別、「　」内は記載原文、⇩は事務局のコメントです。

【阪神・淡路大震災と自衛隊】＊本文

「懸命の救助作業にあたり、多くの被災者の力になったのは、まぎれもなく自衛隊員であった。」⇩ボランティアの存在を全く無視して、自衛隊のみを賛美。まさに自衛隊の国民的な認知を狙ったもの！

【大国日本の役割】＊本文

「日本の役割は私的な感情ではなく公的な国益から考えられなければならない。」⇩国民主権や基本的人権の尊重という現行憲法を否定し、国家・国益を優先！

【韓国併合】＊本文

「一九一〇年、日本は韓国を併合した。これは、東アジアを安定させる政策として欧米列強から支持されたものであった。」⇩自国の正当性のみを一方的に主張。当然、韓国からは強烈な批判が出ている！

【日本国憲法第九条】＊コラム

「日本国憲法は自衛の戦争をする権利や自衛の戦争をする戦力までを否定したのではない。」、「憲法の解釈によれば、わが国は集団的自衛権を行使できないという意見があり、それが国際協力の障害にもなっている。そのため、日本国憲法第九条の表現そのものを改正する必要性が強く唱えられている。」⇩どこかで聞いた表現。まさに憲法調査会における改憲派の主張そのもの！

【日本の国旗・国歌】＊本文

「国旗・国歌は国家を象徴するものであり、その国の歴史や理想をあらわしたものである。」、「国歌『君が代』の君は、日本国憲法のもとでは日本国および日本国民統合の象徴と定められる天皇を指し、この国歌は、天皇に象徴されるわが国の末永い繁栄と平和を祈念したものと解釈されている。」⇩血塗られた日の丸の歴史を尊重しようというのか。君は国民を指すという政府答弁もあったが！

【昭和天皇 国民とともに歩まれた生涯】＊コラム

「敗戦後、天皇は日本各地を巡幸され、復興にはげむ人々と親しく言葉をかわされ、はげまされた。このときの天皇のお言葉は『あっ、そう』という簡単な一語だけということが多かったが、素朴な対応の中に人々は天皇の真心を感じ、あるときなどは、群衆の間から自然に『天皇陛下万歳！』の叫びがおこり、やむことがなかった。」⇩これ以上ない天皇賛美の表現！

【核兵器廃絶は絶対の正義か】＊コラム

「核兵器廃絶を絶対の正義とするのは、その廃絶法に違反するものはいないと想定しているという意味で、人間を性善なるものと安易にみなしているのではないだろうか」⇩国是である非核三原則を踏みにじる記述！

【生命尊重は最高の価値となりうるか】＊コラム

「忘れてならないのは、人間社会には、そうした価値の実現のために、生命を犠牲にしなければならない場合もあるということである。」⇩カミカゼ特攻隊を再現しようとでもいうのだろうか！

【朝鮮半島と日本の安全保障】＊本文

「東アジアの地図を見てみよう。日本はユーラシア大陸から少し離れて、海に浮かぶ島国である。この日本に向けて大陸から一本の腕が突き出ている。それが朝鮮半島だ。朝鮮半島が日本に敵対的な大国の支配下に入れば、日本を攻撃する恰好の基地となり、後背地をもたない島国の日本は、自国の防衛が困難となる。この意味で、朝鮮半島は日本に絶えず突きつけられている凶器となりかねない位置関係にあった。」⇩朝鮮侵略の正当化と徹底した朝鮮民族の差別！

【大東亜戦争】＊本文

「この日本の緒戦の勝利は、東南アジアやインドの人々、さらにはアフリカの人々にまで独立への夢と勇気を育んだのである。」⇩一方的に聖戦論を展開！

教育に関する視察・研修バスを派遣！

― 総勢14人が参加。教育先進県・長野に学ぶ ―

教科書の改悪問題が全国的な課題になっているという今日的な状況を踏まえ、平和センターとスクラム喜望は二月五日から六日にかけて、教育の先進県として名高い長野県の教育関連施設を訪問する「視察・研修バス」を派遣した。

今回の視察先は、理科や生活科の教科書に加え夏・冬休み帳などを自主的に制作（ちなみに、制作したものは県内すべての小学校で実際に採用されている）するなど、地域に根ざした独自の教育を展開し、実に百十四年の歴史を数える「信濃教育会」と、直接的な教育関連施設ではないが、全国的にもめずらしい小児専門病院として開設され一般医療において対応が困難な小児に対する診断・治療・相談・指導を行っている「長野県立こども病院」の二カ所。

歴史ある信濃教育会を訪問

視察にはスクラム喜望所属の五県議を含む十四人が参加したが、参加者の間からは「国からの規制などによって揺れ動いてきた教育のあり様と、それでも地域に根ざしながら生き続けてきた気概を感じることができた」、「教育が再び国家主義的な側面を増大させている中で、地域の歴史や文化を大切にした教育を実践する必要性を痛感した」、「地域に生きる子どもたちの未来に責任を負うという意味で、教育が持つ計り知れない役割を再認識した」。また、こども病院に関しては「子どもの患者一人に対して、看護婦が一人という体制をとっていることは実にすばらしい」、「長野県の子どもたちを、自分たちの責任でしっかりと育てたいという強い責任感を感じた」、「いじめや不登校、学級崩壊といった問題が深刻化する中で、こうした病院が存在すること自体に意義がある。ぜひ石川県においても前向きに検討するよう県に対して強く働きかけていきたい」といった感想が出されていた。

こども病院前で記念撮影